

めに応じて、専門的・技術的立場から指導と協力を

ている。これらの事業内容のうち、研究活動について、
研究課題とその成果の一部を紹介する。

研究課題；遺物による考古史研究、古代官衙遺跡等の調査研究、文化財の自然科学的手法による調査研究（動植物遺存体による環境考古学的研究・年輪による古気候と年代測定に関する研究・広域遺構探査法の開発研究）、文化財の自然科学的手法による保存修復に関する研究（當時微動測定による古建築の構造と保存に関する研究・有機質遺物の材質分析とその保存処理法の開発研究・文化的景観の保存に関する研究）、文化財情報システムの構築と活用法の研究（劣化写真のデジタル画像による復原・全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究・文化財情報ネットワークにおける通信法の研究・遺跡地図情報システムの開発研究）

古代官衙遺跡等の調査研究 昨年度以来の地方官衙や官衙関連遺跡、豪族居宅遺跡などの資料収集作業と分析作業を継続して行い、秋からその成果の一端を、遺跡データベースとして全国に公開した。郡衙関係では、正倉検出例の収集を行い、3月に全国の考古・文献史学の研究者を集めて「郡衙正倉の成立と変遷」という研究集会を開催し、正倉の成立と展開のあり方について討議した。豪族居宅に関しては、建物群の設置状況から3類に大別して階層差を抽出するとともに、集落内における倉庫群を豪族私有の収納施設との観点から再検討する必要があること、存続期間が短期であるという特徴があり、そこに経営拠点の移動や宅地の財産継承の未熟性がうかがえること、などの知見を得た。

劣化写真のデジタル画像による復原 1996年度から開始したデジタルによる画像復原は、2年間で飛鳥寺や飛鳥藤原宮跡発掘調査部保管の4×5判カラーPOジの入力を全て終了した。また、九州地方に多く存在する彩色壁画古墳を銀塩写真で撮影し、それを同じように高画質のプロフォトCDでデジタル化し、画像処理することによって、今まででは発見されていなかった新しい「壁画」の発見に大いに役立っている。

文化財情報ネットワークにおける通信法の研究 遺跡に関する情報を管理する場合の項目設定や、活用方法についての交換標準を検討した。ネットワーク上の情報の管理として、メタデータ一般についての検討を行い、さらに埋蔵文化財関係の情報に特有の項目について考察した。多くの関係者の意見を求める必要があるため、全国の埋蔵文化財関係者らの参加による「遺跡情報管理に関する検討会」を開催し、種々意見交換を行った。

全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査

研究 全国遺跡データベースについて、分野別の遺跡地名表及び近年の報告書抄録を活用して、データの充実を図った。また、全国の遺跡情報のクリアリング・ハウス構築に向けて、問題点を検討した。その結果、全国の遺跡情報のコアの情報を奈文研が提供することとなった。

(沢田正昭／埋蔵文化財センター)

木簡データベースの公開

当研究所では、各発掘調査機関の木簡に関する報告書、及び木簡学会編『木簡研究』に基づいて、全国出土木簡のデータベースを作成してきた。その成果は、既に1992年以來学術情報センターを通じて公開してきたが、最近のインターネットの普及に鑑み、従来の木簡データベースに木簡の写真画像を付した新たな木簡データベースを作成し、1999年5月1日から当研究所のホームページ上で外部用公開を行っている。

この木簡データベースには、外部公開用のデータベースとは別に、奈文研内部でデータの整理を行うための内部用データベースがある。内部用には平城宮・京出土で、文字が読めないなどの理由で未公開の木簡のデータが含まれているが、外部用は木簡概報などで公表したデータのみとなっている。外部用の公開項目は、木簡番号・型式番号・出典・形状・寸法・樹種・木取り・内容分類・遺跡名・発掘次数・地区名・遺構番号・所在地・本文・年号・年月日・国郡郷里・人名、及び木簡画像となっている。

本簡データベース検索結果画面

システム的には、データベースを安全かつ高速に利用できるように、内部用、外部用それぞれに別のハードウェアと、データベースソフトを用意している。内部用データベースに更新データがたまたま時点で、公開可能なデータだけを外部用データベースに転送し、外部用データベースを一括更新している。公開している木簡の点数は、2000年6月現在で、内部用が約140,000点、外部用が約25,000点で、画像データは『平城宮発掘調査出土木簡概報』収載の長屋王家木簡と二条大路木簡を中心に、これまでに約900点を公開している。

利用者はパソコンからwwwのブラウザソフトを使って検索を行うので、特別の検索ソフトを準備する必要がなく、操作も簡便である。検索は全文検索を基本としており、データ中のいかなる語句も検索可能である。本文に

対する検索では、結果の表示をKWICで行っており、結果の参照が容易となっている。

外部用公開から約1年間に、約1万件のアクセスがあった。新規データの入力、データの保守・更新・画像リンクの拡大の他、外字の処理・重複データの処理など、さまざまな課題を抱えたままのスタートであるが、今後より便利なデータベースとして利用していくよう、改善に努める予定である。

なお、このデータベース作成にあたっては、各発掘調査機関と木簡学会の協力を得た。また、長屋王家木簡データベース作成グループが、1990年度から98年度の9年にわたって文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」(データベース)の交付を受けた成果を含んでいる。

(森本 晋・渡辺晃宏)

平城宮跡解説ボランティア事業の開始

平城宮跡を訪れた観光客らに、平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説を行う「平城宮跡解説ボランティア」活動を、平成11年10月5日から開始した。

研究所が募集した264名の応募者から100名を選考し、延べ5日間の基礎研修及び専門研修を受講した89名を、ボランティアとして登録した。1日当たり5~8名が、休館日の月曜を除く毎日活動しており、平城宮跡資料館、遺構展示館を拠点に、解説希望を受付けている。

活動当初から観光シーズンと小学生等の校外学習の時期に重なったこともあり、多くの来訪者を案内し、感謝の手紙が寄せられたり、マスコミに取り上げられるなど、ボランティアの熱心な学習意欲と熱意により、好評のうちにスタートした。

活動開始から平成12年3月までの半年間の活動実績は、延べ約15,000名を案内・解説し、一人当たり月平均2日の活動状況である。

研究所としても、ボランティア活動を円滑に推進するよう、ボランティア専用ウィンドブレーカーを配布し、12月には所員を交えた交流会を実施、また

比較的来訪者の少ない2月~3月を利用して、学習会や見学会を行った。

今後の課題としては、広大な平城宮跡をくまなくカバーできるようボランティアを増員し、東院庭園、朱雀門にも活動拠点を設けることや、展示施設の充実、ボランティア事務局の設置等により、ボランティア活動を支援していくことなどがある。

(庶務部庶務課)



観光客を案内するボランティア